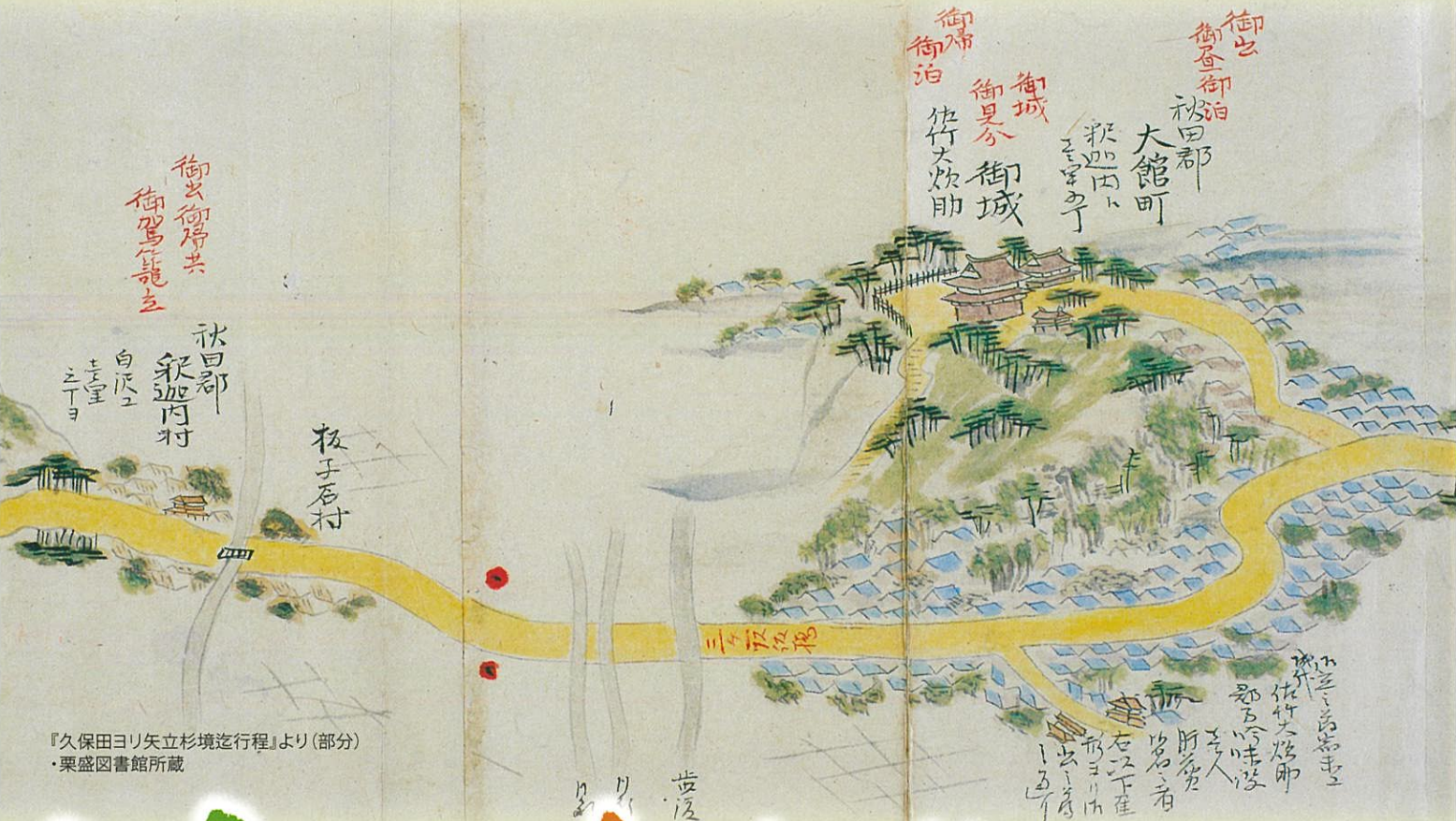


とうほく街道会議第13回交流会 大館大会



『久保田ヨリ矢立杉境迄行程』より(部分)
・栗盛図書館所蔵

とうほく街道会議

報告書

“歴まち”大館の明日を考える

とき 平成29年 10月13日(金)~14日(土)
ところ 大館市民文化会館 秋田県大館市桜町南45-1

主催：とうほく街道会議第13回交流会 大館大会実行委員会

とうほく街道会議、羽州街道交流会、NPO法人あきた地域資源ネットワーク、矢立自然の会、北羽歴史研究会、大館市文化財保護協会、大館商工会議所、大館北秋商工会、(一社)大館市観光協会、大館市(産業部観光課、建設部都市計画課・まちづくり課)、大館郷土博物館、秋田県北秋田地域振興局、国土交通省能代河川国道事務所

後援：あもりかいどう会議、みやぎ街道交流会、ふくしまけん街道交流会、出羽の古道六十里越街道会議、越後米沢街道・十三峠交流会、NPO法人東北みち会議、NPO法人全国街道交流会、(一社)東北地域づくり協会、秋田魁新報社、北鹿新聞社、河北新報社、北羽新報社、朝日新聞秋田総局、毎日新聞秋田支局、読売新聞秋田支局、NHK秋田放送局、ABS秋田放送、AKT秋田テレビ、AAB秋田朝日放送

協力：街道観光推進会議(観光庁「平成29年度テーマ別観光による地方誘客事業」)
(本事業の一部は、観光庁「平成29年度テーマ別観光による地方誘客事業」で実施いたしました)

広告等 協力：DOWA通運(株)、(株)大館製作所・大館桂工業(株)、奥羽電気設備(株)、大館矢立ハイツ、丸山建設(株)、花岡土建(株)、秋北バス(株)、秋田県建設設計事業協同組合、(株)北鹿、(株)吉原鉄工、(株)伊藤羽州建設、(株)大成工務店、(有)石川建設、(株)オオタベ、(有)成田組、ろうきん設計事務所アマランス、プラザ杉の子・日景温泉、(有)県北カッター、アトリエ105、(株)タイセイ、(株)巽工業所、(株)北鹿新聞社、(株)花善

とうほく街道会議 “歴まち”大館の明日を考える

とうほく街道会議第13回交流会 大館大会

Program

10月13日(金)

交流会 第一部「フォーラム」 13:00～17:30

◆オープニングセレモニー 13:00～14:00

- ・オープニング 「大館囃子」 大館ばやし保存会
- ・主催者挨拶 大館大会実行委員会 委員長 清野 宏隆
とうほく街道会議 会長 宮原 育子
- ・開催地挨拶 大館市長 福原 淳嗣氏
- ・来賓挨拶 秋田県建設部都市計画課長 竹村 勉氏
国土交通省能代河川国道事務所長 坂 憲浩氏
- ・次回開催地挨拶 アルカディア街道IB倶楽部会長 渋谷 光夫氏(山形市)



大館囃子

◆基調講演 14:00～15:30

「秋田藩における大館の歴史的位置」

講師：渡辺 英夫 氏 (秋田大学教育文化学部 教授)

※15:30～16:00 休憩 (会場移動、及びパネル展の観覧等)

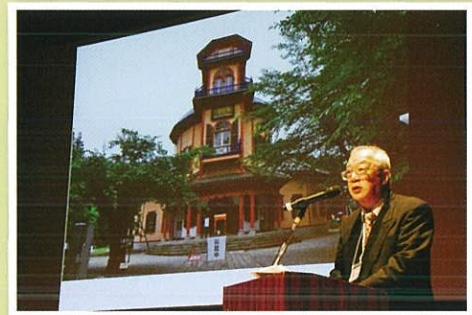
◆第1分科会 16:00～17:30

鼎談「大館地方の交通史から新たな交流を探る」

鼎談者：清野 宏隆 氏 (大館市文化財保護協会 事務局長)

坂 憲浩 氏 (能代河川国道事務所長)

福原 淳嗣 氏 (大館市長)



次回開催地挨拶

◆第2分科会 16:00～17:30

パネルディスカッション

「ガイドから始まるまちづくり～歴まちガイドを目指して～」

コーディネーター：田中 孝治 氏 (NPO法人全国街道交流会議 理事)

パネリスト：中村 弘美 氏 (矢立自然友の会 会長)

澤木 博之 氏 (男鹿半島・大淵ジオパークガイドの会 会長)

平井 太郎 氏 (NPO法人小田原まちづくり応援団 副理事長)

交流会 第二部「街道談義」 18:30～20:30

◆郷土料理や地酒による交流会

活動紹介 **パネル展** 12:00～17:30

「歴史まちづくり」関連 (大館市)、東北各地の街道関係連携団体、能代河川国道事務所PRパネル等

10月14日(土)

探訪会 集合 8:30～

A 【羽州街道矢立峠コース】

B 【大館歴史まち歩きコース】

実行委員長あいさつ

大館市文化財保護審議会
会長 清野 宏隆



本日、市内はもとより、東北各地から大勢の方々にご参加いただきまして、ありがとうございます。

大館地方は、古くは「火内」(ひない)といわれ、平安後期は奥州藤原氏、鎌倉時代からは浅利氏がこの地方を治め、その後、佐竹義宣の常陸からの移封に伴い、一族の小場義成が慶長13年に大館城に入城し、本格的な町割りを行って城下町が形成されました。大館のまちは、戊辰戦争による焼失や昭和における4度の大火があったものの、古くからの町割りが今も残り、市民の営みがしのばれる歴史的資源が数多くあります。

また、江戸時代以降、鉱山の開発や秋田杉に代表される森林資源を産出し、羽州街道や米代川の舟運を通じて経済が発展し、また北国特有の風土の中で地域固有の祭礼や祭典、民俗芸能、伝統文化が生まれました。これらの中には天然記念物の指定を受けている秋田犬や比内鶏など、市民の手により守り育てられてきた誇るべき財産が多数ございます。

現在、大館市は「歴史まちづくり法」に基づき、歴史的風致の維持向上を図るとともに、地域固有の文化や伝統、風習に光をあて、市民が自信と誇りを持てるようなまちづくりに取り組み、今年3月には、その基軸となる「歴史的風致維持向上計画」の認定を国から得たところです。

歴史を学ぶことは、何人もの人生を知り、何百年も生きたような豊かさを実感できます。その解釈は多様ですが、私達が生きていくうえで、過去から学び未来を見据える礎とするために、今日は「“歴まち”大館の明日を考える」をテーマに皆さんと一緒に考える縁(よすが)になればと思っております。

最後になりますが、開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係諸団体の皆様に感謝申し上げます。

とうほく街道会議 会長あいさつ

会長 宮原 育子



東北地方は、松尾芭蕉、菅江真澄、吉田松陰、イザベラ・バードなど多くの旅人たちにその魅力が認められており、紀行文などで辿ることが出来ます。彼らが歩いた「街道」は、多様性豊かな「いくつもの“くに”を繋ぎ、互いの異なる文化を認め合い、新たな交流とともに、さらに多様な文化を生み出してきた場」であったといえます。

とうほく街道会議では、この街道をひとつのキーワードとして、東北の歴史、文化、風土や自然豊かな景観など多くの魅力を掘り起こし、しなやかで美しい故郷「東北」を次代に引き継いでいくため、様々な活動を実施する個人や団体が交流・連携を図るプラットフォーム的な役割とともに、地域の自然、歴史・文化、食などを活用した街道ツーリズムなどの地域コミュニティビジネスの支援をめざしています。この活動の一環として、東北各地で毎年交流会を開催しています。

大館市は、歴史を大変大切にしながらまちづくりを進めています。そこで、この歴史まちづくりをテーマに交流会を開催し、各地から参加の皆様も含めて広く取り組みの内容を知るとともに、まちづくりを一緒に考えて頂きたいと思っております。



開催地あいさつ

大館市長 福原 淳嗣 氏

本日、とうほく街道会議第13回交流会を大館市で開催しましたところ、東北各地も含め多くの方々にご参加頂きました。大館市民を代表して歓迎を申し上げます。

さて、万葉集の中で“みち”という字を丹念に調べた人がおり、「道・路・径・みち・未知」の五つの言葉で上手く使い分けているそうです。だからこそ“みちの奥”なので、“みちのく”と教えて頂きました。

昨年3月に政府が策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」において、この東北を“日本の奥の院”と位置付けて、周遊ルートをつくること。かつ、外国からも含めてお客様を3倍にすることを政府として打ち立てています。

既に東北6県に来る外国からのお客様数を1つの市で達成している函館の工藤市長と話す機会がありました。工藤市長は、「東北には、北海道にあるものは既に全てある。かつ東北には、北海道にないものがまだまだ沢山ある。だから函館は、東北と組む」とはっきりと言いました。

そうするならば、このとうほく街道会議を通じて、改めて東北の魅力を私たち同士が見つめ直して、東北のまちづくりに生かす未知づくりをも考えて頂ければと思います。

来賓あいさつ

秋田県建設部都市計画課長 竹村 勉 氏

大館市では、今年3月に「歴史的風致維持向上計画」を策定されましたが、秋田県内で初めてです。この中で、「歴史・文化・伝統」を基軸に、歴史的風致を大事に守り育てながら、「住んでよし・訪れてよし」をまちづくりの目標としていることは、他都市の模範とするところです。更に、今回「歴史まちづくり」をテーマに、この街道会議交流会を開催することは、大変意義深いものと思います。

現在、秋田県では、次の県政運営の指針となる「第3期ふるさと秋田元気創造プラン」を策定中です。この中で、まちづくりに関しては、「将来にわたり持続可能でコンパクトなまちづくり」を大きな柱として考えています。

コンパクトプラスネットワーク、即ち交通ネットワークということも非常に重要なテーマとなっています。この意味でも、本日の議論で、更に意義が深まって行くものと考えています。

国土交通省能代河川国道事務所長 坂 憲浩 氏

私は埼玉生れで、北海道から赴任して1年半になります。この地域のことを知る1つのきっかけは、シーダ秋田カヌー同好会の秋田杉のカヌーに乗って、米代川を上流から下流まで下る機会を得たことです。案内の小林会長から、昔の米代川は舟運が盛んで、阿仁川上流の鉱山・藤琴川では精錬所があったことや、戊辰戦争の話などを川の流れとともにきめ細かく教えて頂きました。

今年は、戊辰戦争から150年の節目、小場義成が大館入城から407年です。そういった150年、400年前の人々が利用した羽州・阿仁・鹿角などの街道や舟運の歴史を踏まえながら、地域連携を深めようということは非常に大事なことだと思います。併せて、これからの150年後、400年後に、今ある国道7号や高速道路が、どのように評価され、彼らがどう活用していくのかについて、このような交流会を通じて、議論が重ねられたら良いと思っています。

江戸期や明治期に文人墨客などが東北の街道筋を歩いて書物を沢山残しています。地域のことを赤裸々に書かれる方が多いですが、北国の厳しい環境の中で、地域の人達が貧しいながらも心豊かな生活を送って来たことが読み取れて、今秋田県民である私の誇りです。

「秋田藩における大館の歴史的位置」

地方知行制を維持した秋田藩において佐竹一族小場氏の治める大館地方が果たした歴史的役割について、秋田藩の本城・支城体制、城代小場氏と佐竹直臣団、津軽・南部両藩の押さえと人々の交流などの観点から概説していただきました。

講師
渡辺 英夫 氏
(秋田大学教育文化学部 教授)

歴史の中に、江戸時代も含めて、まだ解っていない部分がたくさんあります。関東や関西などの事例で作った教科書とは違う世界がこの東北に広がっており、専門の立場で調べてみるとそれがなかなか難しい。

文書のあり方が違うのです。秋田藩では基本となる社会構造の研究が進んでいないということ、皆さんにぜひ知ってもらいたいと思います。

今日は、そういう中で、解っていることだけを選んでお話してみます。秋田藩の大館はどこなところか考えるきっかけになれば幸いです。

I. 本城・支城体制

佐竹氏は、文禄3年(1594)に秀吉の命を受けて太閤検地を行ない、翌年、その成果を踏まえて常陸の国54万石の所領を秀吉から安堵され、戦国大名から近世の大大名へと変わったのです。

検地の結果、義宣の父義重は常陸太田の城に残りましたが、佐竹氏の当主となった義宜は水戸城に入りました。義宜は、茨城県と栃木県の東部に鹿島城、府中城、小田城、石塚城、那須城、松野城などの支城を置き、一族の城将(大将)と100人規模の家臣団を配置して、佐竹氏の領地を守るという本城・支城の体制を組んでいました。

戦国大名を支えてくれる存在として地域豪族の国衆と呼ばれる家臣団がいましたが、戦国大名だった佐竹氏は、これらの重臣たちの力(石高)を把握できませんでした。戦国大名はそこまで入り込めなかったからです。

ところが太閤検地を行なった結果、一人ひとりの武将が支配している石高が解りました。これが戦国大名と江戸時代の大名の一番違うところです。

秀吉の検地の目的は、全国の大名の軍勢力を調べることで、朝鮮半島に2回にわたって侵略戦争をしましたが、その時どれだけの軍勢を朝鮮国に差し向けることができるのか、各大名の軍隊の力を把握する必要があったためです。

佐竹義宜は太閤検地のおかげで、非常に強い権力を獲得することが出来たので、領国内の武将たちをほぼ総入れ替えしました。例えば、石塚村に1500石の領地を持っていることが分かった石塚氏は、筑波山の麓の片野城の領地1500石に移動させるというような入れ替えをおこないました。

大豪族・大山氏を霞ヶ浦東方の小高城に移しました。霞ヶ浦の南方に徳川家康がいることを前提に、家康と対峙する前線基地とするためです。そして、佐竹氏はこの体制で慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに臨んだのです。

佐竹の北家、東家、南家、西家について説明します。常陸太田に本拠地を置いた戦国時代の佐竹氏は、鎌倉時代の終わりから室町時代には、常陸の長倉など開墾可能な土地に、次男、三男たちを分家させ、開墾を命じました。そして、やがて各氏は開墾した、その土地の名を名乗るようになりました。

しかし、戦国時代末期になると、5代も7代も前の親戚とは、同じ血縁とはいえ、大分離れてしまいました。そこで、佐竹氏の総本家では、新しい親戚を常陸太田城の近くに屋敷だけを与

えて分家させることにしました。それは、1番目が太田城の北側に屋敷を与えられた北家で、2番目が東家、3番目が南家でした。西家はまだありません。そして、文禄から関ヶ原の頃になると、彼らを独立させ、北家には久慈を、南家には府中(茨城県石岡)を守らせるという形で、それぞれ城主に取り立てていきました。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで、佐竹氏は、日和見を決め込みます。家康が会津の上杉氏を攻めるため、佐竹氏に対しては、仙道口(福島県須賀川辺り)から、会津に攻め込むよう指令を出しますが、佐竹氏は、領地の一番北の赤館(福島県棚倉)に全軍を結集させ、攻め込むかの様な体勢を見せますが、実際には一切軍を動かさませんでした。

その時、石田三成決起の報を受けた家康は、栃木県の小山から関ヶ原へ向かい、三成と戦うのですが、佐竹氏は領地から兵を出さませんでした。実は、このとき石田氏、上杉氏、佐竹氏は相互に連携を取り合っていました。最後まで家康にその尻尾を掴まえられることはありませんでした。

慶長7年(1602)家康が、朝廷から従一位を授けられると、それを祝って佐竹氏も京都に出向きます。家康に対して「上杉が会津から一步も出られない様に阻止していた」と堂々と主張しました。その時点で、家康には上杉と佐竹の密約に関する文書を発見できていなかったため、佐竹氏を改易させるまでには至りませんでした。しかし、関ヶ原の戦いの最後の戦後処理が行われ、それが佐竹氏の処分でした。

佐竹氏は、家康によって国替えという形で常陸の領主を解かれます。出羽の国の大名として徳川の体制を支えよ、というもので、常陸の所領は全部取られてしまいました。

その結果、佐竹氏は慶長7年9月に秋田に移って来ます。その時、義宣の父義重は、常陸の国から秋田に入り、横手、金沢、六郷へと進みました。一方、義宣は京都伏見で、家康から指令を受け、常陸に寄らず、まっすぐ秋田に来て六郷で父と落ち合います。

当時、横手城には戦国大名小野寺氏が君臨していましたが、関ヶ原の処分により改易になったので、小野寺氏家臣団は行き場がなく、不満を募らせ鬱屈していました。そうした平鹿地方を手薄にしたまま、佐竹の全軍を土崎の湊城へと移してよいかの判断が必要でした。

そこで、父・義重は六郷に全軍を結集させ、義宣の到着を待って話し合った結果、領地の南の方に武将を残していくことにしました。義宣の従弟・南家の義種を湯沢に、増田には東家の義賢とその副将に今宮氏、横手には伊達氏とその副将に松野氏、金沢には梶原氏、角館には義宜の弟蘆名義勝とその副将として須田氏、そして北家の義廉を紫島城(大仙市中仙辺り)に配置する布陣を決めました。

常陸から移ってきた武将たち一族が、それぞれの地域の城に進駐軍のまま居座って、常陸時代と同じ形の本城・支城の体制で領地を治めることになったのです。この結果、新領地の南の方は、支城が沢山残されている形になりました。

翌年、土崎の湊城を廃城し、久保田を本拠地にした佐竹氏

は、その年、檜山、米内沢へと軍勢を進めます。それまで湊城主だった安東秋田氏が常陸の宍戸に移ったあと、そこにはほとんど武將はいませんでした。米内沢は地付きの豪族・嘉成氏が治めていましたが、嘉成氏は浅利氏との敵対関係があったためか、早い段階で佐竹氏を受け入れました。佐竹勢はここを前線基地に、更に北へと兵を進めます。

一方、比内(大館地方)の浅利頼平は、慶長3年(1598)に京都の秀吉のもとで、大名として生き残りをかけた大名昇格運動をしましたが、京都で突然亡くなります。残った頼平の弟が浅利一族をまとめて扇田を中心とした地域に勢力を張って佐竹勢に対抗します。

このほか、鹿角の南部氏と、その南部氏に謀反を起こして独立した津軽氏、そして浅利氏の三者が戦っていたのが、戦国時代末期の大館方面の様相です。

浅利氏の当主頼平が亡くなったところに佐竹氏が入って来て、非常に軍事的緊張状態となりますが、佐竹勢はここを徐々に制圧し、大館、十二所へと支配の手を伸ばし、ついに慶長13年(1608)にこの一帯を制圧し、小場義成が檜山から移って、正式に大館城代となります。

領内を平定した義宜は、沢山ある支城を整理し、徐々に廃止していこうとします。そこに、元和元年(1615)一国一城令が出ます。これは家康が大坂の豊臣氏を滅ぼした年に、西日本の豊臣に所縁の深い大名を念頭に出したもので、東北や北日本の大名に対しての適用は5年ほど遅れ、秋田藩の場合、元和6年(1620)になります。

これを受けて、支城の城破(しろわり)を進めている佐竹氏へ、2代将軍秀忠から「本城のほかには横手と大館の2カ所に城構を認める旨」を伝えてきます。その結果、佐竹氏はこの3カ所以外の城を全部壊し、陣屋構(1万石未満の旗本たちが所領を治める時の陣地)という、規模の小さな城下町に造り替えていくこととなります。こうして角館、湯沢も城構を壊し、規模を小さくした陣屋構の町に造り変えられました。

一方、侍たちが集まって暮らしている町を給人町と言います。秋田藩では、小野寺氏の家臣たちを佐竹の家臣に取り立てて、角間川(大仙市)に集めて住まわせました。刈和野もそういった給人町です。

藩領北部では浅利氏の遺臣や地付きの侍たちが、佐竹氏の中にどう取り込まれていったのか不明ですが、少なくとも角間川の様な給人町がありません。

町奉行支配の町人町は、久保田と土崎の2カ所で、能代は港町なので能代奉行が直接治めていました。ほかに、大館、十二所、檜山は、何十人、何百人規模の侍が駐留する城下町や陣屋町になっていきます。

また、在町は、町場としての賑わいを見せますが、そこに住む者はみな百姓の身分です。北部では扇田や荷上場があります。しかし、町場としての展開は弱いのかなと思います。

鉾山町は藩領各地にあります。北部には阿仁銅山がその代表格で、荷上場の加護山製錬所、藤琴は鉛の鉾山、八森にも鉾山がありました。

大館は幕府から城構を認められた正式な城下町です。城代・所預は城付き領といい、一円的な支配を任せられ、数百人規模の軍団がここに駐留しました。大館には、佐竹氏から直接扶持をあてがわれる武士と直臣足軽がいて城代がこの者たちを指揮しますが、それとは別に小場氏が自ら召し抱える家臣(藩から見た陪臣)もたくさん住んでいました。当初は、常陸時代と同じ様に与力・指南の編成で60~70年を過ごし、そのあと城代(組親)が直臣(組下)を指揮する編成に替えられました。大館

の特徴は、横手や角館などと違い、副城代がないことにあります。

大館には、何百人もの侍がいましたが、参勤交代の時に、藩主に付き従って江戸に扈從(こしょう)することはなかった様です。

II. 城代小場氏と秋田藩直臣団

秋田藩の家格制度はかなり複雑です。一番上が佐竹名字衆4家で、佐竹北、東、南、西の順の格式です。この人たちは、藩主の諮問には応えるけれど、藩政には直接関与しないというのが一応の原則です。これは徳川御三家と同じような形です。

次は、引渡(譜代の門閥や昔から仕えていた重臣)、廻座(門閥の分家や戦国時代末期に取り立てられ功績がある人たち)の順の家格です。四家衆は基本的には家老になりません。引渡、廻座の格式の人たちが家老を務めますが、石高と格式は必ずしも一致しません。

それから下は、一騎、駄輩、不肖の家格で、ここまでが知行取です。その下は、近進・近進並、足軽身分の者たちが沢山いるという家格ができていました。

名字衆は、幕府の将軍のもとに証人として参府する役割を担っていました。これは寛文5年(1665)までの制度で、いわゆる人質です。大名の奥方や母親とは別に、重臣やその若侍たちも人質として江戸に行き1年間暮らさなければならないという制度です。

外に、佐竹の当主となる者が元服をして将軍の前に初拝謁する乗出(のりだし)の時に一緒に従い、将軍に拝謁するのも名字衆の役目です。また、参勤交代で藩主が国元に戻ると、その報告のため江戸に向かい、将軍に拝謁して、お礼を申し述べる仕事もありました。なお、東家はその仕事をほとんどしませんでした。大館城代は、証人として何回か江戸に上っています。

大館城代初代で小場家10代目の義成の父義宗は、佐竹義重の次弟で、佐竹21代目義宜の叔父にあたります。小場家初代当主となった義躬は、佐竹11代義篤の子で、12代義宜の弟です。この人が小場の土地を与えられて分家し、そこを開墾して、小場氏を名乗るようになりました。

小場氏の家系の特徴は、3代目義房、5代目義武、6代目義村が養子で、この後は、全部直系でつながっていく点です。その結果、大館での小場氏の発言力と地位は段々と高まっていきます。

明暦4年(1658)3代目城代義房の時、小場氏は2代藩主義隆から佐竹姓を賜りました。

3代藩主義処が元禄16年(1703)に亡くなった時に「御殿様は亡くなる間際にこう言い残した。席順の1番目は北家、2番目は東家、3番目は佐竹義方で、南家よりも上である」と5代目城代の義方は書き残しています。

その結果、この年8月に、4代藩主義格が5代將軍綱吉に謁見の折、一族衆も従って江戸城に登り、北家、東家、小場氏、戸村氏、渋江氏、梅津氏の順に挨拶しました。このとき南家の義安は、席順の不服から仮病を使って江戸に行きませんでした。それほど南家と大館の小場氏の間で席順をめぐる確執が大きかったためです。

この時、小場氏はまだ「西家」は名乗っておらず、享保21年(1736)6代目城代義村になって、5代藩主義峯から佐竹西家の称を許されます。

そして、7代目義休の時に再び南家の義良と席次争いを繰り広げて、2代にわたって席次を争うトラブルを起こしています。

その後の大館城代ですが、寛政以降は、病気や、藩主から「謁見を停められ蟄居」という様な処罰を受けるなどして、佐竹西

家は表舞台での活躍はほとんどありませんでした。

Ⅲ. 藩境警備と人びとの交流

正保2年(1645)に秋田藩が幕府に提出した『大道小道并船路之帳』という史料があります。ここには、領内の宿場町や宿場間の里程、橋、徒渡り、舟渡りなどの交通情報が書き記されています。このとき秋田藩は、能代を経て八森に抜けていく道筋と、楡山・大館を経て矢立峠越える道筋の二つを本街道として幕府に提出しています。

能代、八森を通る道筋は、南部氏に謀反を起こして独立した津軽氏が参勤交代で碓ヶ関を通りたくないため津軽藩からの要請でしょうか。その後、1700年代になると津軽氏と南部氏も大分仲が良くなり、海岸沿いの本街道は廃止されて、羽州街道は矢立峠を越える道筋だけとなりました。

歴史学からすると、厳密には街道というのは道筋に宿場が設けられ、宿場には人足と馬が置かれ人の移動や物の輸送を助ける宿継伝馬という交通制度が整えられた道筋だけを指します。



▲図1 『出羽一國御絵図』

図1の絵図は、秋田県公文書館所蔵の県重要文化財指定の『出羽一國御絵図』です。これは正保4年(1647)に作られ、幕府に提出された絵図の控えと考えられています。米沢(山形)から矢立峠までの出羽一國を描いた大きな図面で、縦12.25m、横が5.35mもあります。私から言わせればこれは美術品です。



▲図2 『出羽一國御絵図』元図の一部

図2はこれを作るための元図で狩野派の絵師が描いています。歴史の資料としては、むしろ図2の元図の方が重要です。

この元図は、藩の侍たちが絵師と共に領内を歩き、実際に調べて作ったものです。大館、曲田、十二所など描いてあります。また、本街道は太い道筋で描かれていて、一里塚は対の黒丸●です。正保4年の段階では、秋田藩としては、羽州街道だけでなく十二所を越えて鹿角方面に向かう道筋も本街道の扱いです。なお、この元絵図でも、金光寺で分かれる2本の本街道が記されています。



▲図3 南部盛岡藩と秋田藩の藩境

図3も秋田県に残っている図面です。米代川が東から西に流れていきます。また、北から南に延びる黒い筋が藩境を示す線です。盛岡藩と秋田藩では、この辺りの帰属をめぐり、江戸時代最初に激しく争い、幕府の裁許で領地を決定しました。

その結果、一部ですが米代川の真ん中が藩境になり、どちらかの藩が藩境塚を造りました。地元では藩境柱だと言われています。どちらの藩がこれを造ったかはわかりません。

尾去沢鉱山は盛岡藩領ですが、その産銅は筏が川舟に乗せて米代川を下り、能代から海船に積んで大坂に届け、幕府の精錬所で純度を高めて長崎輸出銅になります。しかし、川に藩境塚があり舟運がかなり阻害されてしまいます。それでも、それをやってしまうのが政治の力です。

結局、尾去沢鉱山の銅は、牛の背に銅板2枚を積んで山々を越え、同じ盛岡藩領の陸奥湾の野辺地湊に持って行くようになりました。馬は険しい山岳地帯で蹄が割れるため牛を使いました。南部牛追唄は、盛岡と三陸海岸を繋ぐ道中だとか、内陸部の沢内村方面の唄だと言われていますが、鹿角方面の牛方たちも民謡を歌いながら、一人で牛を6頭曳いて野辺地までを往復していたのではないのでしょうか。

「南部牛追唄」(♪～ 田舎なれども サアハエー …)は有名な民謡ですが、この地でもこれと同じ状況が展開していたと私は考えています。

『秋田藩町触集』という法令集を見て行くと藩領北部には、羽州街道の矢立峠を越えて行く長走と、小坂に行く新沢(しんざわ)、それと十二所の近くの葛原(くぞわら)の3カ所に番所があって、十二所の侍は十二所番所、大館の侍は新沢と長走の2カ所の番所の出張警備に当たっていました。秋田藩の他の番所と違うところは、ここは足軽ではなく全部正規の侍4人が詰めて警備に当たっていました。

この当時、能代湊を通して、上方から木綿の衣類などが入って来て、米代川舟運や街道を通じて、十二所から鹿角方面へと盛んに移出されていました。逆に南部鉄器や鉄製農具などが十二所や新沢を越えて大館城下や扇田の市へ運ばれました。そこで南部鹿角の産物を売って、帰りに上方の産物を仕入れて帰るというような緊密な交流が積極的に行われていました。

この様に、南部鹿角地方の商人が扇田の日市に来て交易を行ないましたが、ここでは夜間通行も許されていました。「夜でも証明書を出せば、十二所の番所を通してよい」と秋田藩は命じています。封建制度の時代に藩境を夜も通すことは大変珍しいことです。これは、江戸時代の平和な時代には、鹿角とこの大館比内地方を結ぶ緊密な交流があったことの証です。

それが戊辰戦争では、盛岡藩勢が大館城下まで攻めて来て、大館の町が焼かれてしまうという、悲惨な結末になってしまいました。

なぜそんなことになってしまったのか、これは歴史学の課題です。現代を生きる我々としては、こういうことを教訓として、よく知っておかなければならないと思います。

「大館地方の交通史から新たな交流を探る」

近世における羽州街道、米代川舟運や、明治以降における道路整備が果たしてきた役割を歴史的（縦軸の流れ）・空間的視点（横軸／面的広がり）から探り、新たな交流を踏まえた歴史まちづくりを考えました。

鼎談者 **清野 宏隆氏** **坂 憲浩氏** **福原 淳嗣氏**
 （大館市文化財保護協会事務局長） （能代河川国道事務所長） （大館市長） ※進行役兼務

福原淳嗣（以下**福原**） 私が進行役を指名されましたので、よろしくお願ひします。

今日は、清野先生からは大館の歴史・街道の話、坂所長からは明治以降どういふ流れになのか。私は、これからのまちづくり（歴史まちづくり）とそのためのみちづくりの話したいと思います。なお、私は、理由は後ほど申しますが、17時で離席しますので、ご理解をお願い致します。では、最初に清野先生からお願いいたします。

羽州街道の実情と役割

清野宏隆（以下**清野**） 私は、近世の羽州街道と大館地方について、範囲を絞って話を進めます。

羽州街道は、福島から青森の油川までの58次（宿）です。幕府と藩は街道の整備をしました。一里塚が築かれ、街道は農民の労働力で造っています。また、要所に関所を設置し、大館では御境口番所（おさかいぐちばんしよ）を津軽境の長走に置きました。参勤交代では、津軽藩主が寛文年間到大間越口から碓ヶ関口へ変更しました。

羽州街道を絵図で紹介します。図-1は、『出羽国秋田領絵図』の大館部分で、絵図としてかなり正確なもので、鹿角街道も書き込まれています。矢立峠



▲図-1 『出羽国秋田領絵図』の大館

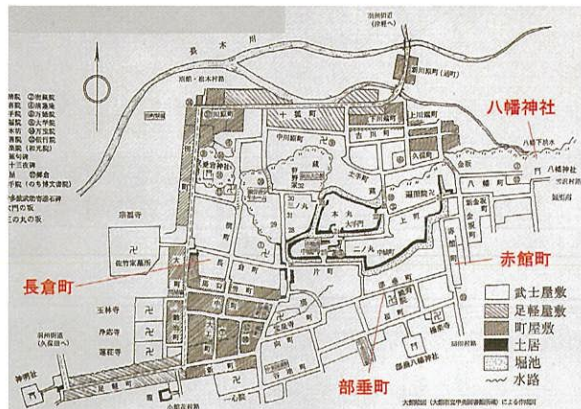


◀図-2 矢立峠の道

の道は、図-2の絵図（『久保田ヨリ矢立杉迄行程』）から難所だったと分かります。

道の普請と維持は、近郷近在の村々に村高に応じて場所（丁場）を決め担当させました。例えば、花岡村は、当時85戸で、矢立峠の付近を担当しています。地元の農業土木の権威者石井嘉右衛門、小林重右衛門、佐藤文治は、道路の指導にもあたったと思います。

河川は、道路交通上の大きな障害でした。『小坂通道中記』によると長木川では、船渡し、夏は瀬越し（歩いて渡る）です。津軽藩主が通る時は、仮橋が架かることもありました。



▲図-3 藩政期の大館町図（模式図）

近世の大館のまちづくり

大館の城下町は、羽州街道とマッチして繁栄しました。図-3は、色々な絵図をもとに作成した模式図です。まちづくりを町割（まちわり）といいます。本丸、二の丸、三の丸が大館城内です。武士が住む町を内町、町人（農民も含む）の町を外町（とまち）と言いました。身分制や軍事を意識して作られています。羽州街道沿いの外町は、流通の役割を担ったわけです。武士の生活には、商工業者が必要で、重要であったわけです。今日も、内町は住宅地、町人町はほぼ商業地で、当時の町割の面影を残しています。

また、長倉町、部垂（へだれ）町など常陸太田市に由来する由緒ある町名が残っています。この様に古い地名を変えないで、今もあることに意味があると思います。外町は、延宝3年（1675）の大火を1つのきっかけとして、荒町、馬口労町、中町に住んでいた百姓たちを田町や川原町に移し、荒町を大町に改称しました。大町には、宿駅業務（公用書状、伝馬、助郷）の間屋場や大名宿の本陣がありました。それから300年余の最近まで大町は商業の中心でした。大町、馬喰町、中町、新町は、外町4町という言い方をされていますが、お祭りもこの4町が行っていました。更に北の田町、川原町、独鈷町、通町までが外町です。

米代川の舟運ですが、川筋に舟場があり、大館船場は大きな河港でした。北前船とも結ばれ、移出品は米や木材など、移入品は木綿や古着などです。物資の輸送には、舟運の役割が大きかったと思います。幕末に出版された『東講商人鑑』は、商人・旅人の案内本です。これに外町4町の宿屋・問屋などが掲載され、繁栄を物語っています。

明治以降現代までの道路整備の変遷と効果

福原 続いて、坂所長に明治以降についてお願いします。

坂憲浩（以下**坂**） 現在の国道7号は、明治18年に全国44路線を内務卿が告示した時は、国道表の41番目でした。その後、大正8年に道路法が初めて日本に出来た時は国道5号です。昭和27年に道路法改正があり、ようやく国道7号になりました。

明治18年のルートは、秋田から一日市、羽州街道と同じに

松山を經由して、鶴形、大館、弘前、青森に至る道でした。明治20年に秋田県議会議長が、国道の路線を松山回りから能代の港經由へ変更の建議書を内務大臣に出し、明治23年に許可されています。

この頃の貨物輸送について、明治8年、当時日本一の小坂の鉱山に最新鋭の製錬機械を運ぶ記録が『小坂鉱山100周年誌』にあります。そのドイツ人機械技師の日記によると、運搬総重量400tある最新鋭諸機械とともに横浜港を6月に出港し、能代港は水深が浅いため、船川港に持ってきます。先ず平底船(50t積)で八郎潟を横断し、出戸沼・長崎沼・浅内沼などがある地峡に沿って能代に至ります。ここから小型船(5t積)で米代川を遡って大館に進み、小舟(2t積)で毛馬内に運びます。ここからの10kmは人と牛馬で運搬しました。10月下旬まで続き、一番重い荷物は900kgだそうです。

道路整備の進んだ現在は、大館市の田代に三菱重工のロケット試験場の事例あり、能代港からロケットエンジンや燃料等を特殊な車両により一日で運搬しています。

大館地方の道路整備は、明治7年に北秋田郡綴子村から釈迦内村で始まり、明治11年に完成しました。明治天皇のご巡幸にあわせた整備です。当時は図-4の風景だった様です。江戸時代の街道は、渡河が障害でしたが、明治新政府になってから道路整備に併せて、架橋も急速に行われました。

馬車や人力車台数などの推移を見ると、明治38年の奥羽本線全線開通の時から、乗用馬車が増えて来ます。駅に向かう短い距離の利用が増えたと想像されます。



▲図-4 大館地方の新国道

明治からの移動の時間変化を見ると、明治時代は馬車で、大館市～能代市は6時間、能代市～秋田市は6.5時間を要しました。それが平成8年度末だとそれぞれ1.4時間、1.5時間に、平成29年度末では1.2時間、1時間となり、道路整備とともに時間が大幅に短縮しています。

今後の更なる交流に向けた方策

福原 どうもありがとうございます。道が整うと、人・物の交流が進むというお話でした。それでは、私からは、2つの「まちづくり」のお話をします。

福原 1つは、道が出来ると町の経済が活性化する話です。2つ目は、まちづくりへの新しいみちづくりの話です。

先ず、高速道路が出来てきて、どの様なことが起きているかです。今の大館は、県内で最も有効求人倍率が増えています。工業出荷額を見ると、能代山本地区は約870億円、大館北秋は2.5倍の1900億円で、間もなく2000億円を越えます。人口が減っているのに工業出荷額が伸びています。能代・北秋田・大館の付加価値生産性(工業出荷額/人口)が、秋田市を圧倒的に超えます。これが高速道路による経済波及効果の重要な話です。

これからは、この効果を大館の果実だけにしてはいけなく考えています。これからのまちづくりは、大館人としての歴史と誇りを持って、そこから仲間をつくって、町と町が繋がりに展開していくため、ハードとしての道が必要だと考えています。

今年3月認定を頂いた歴史まちづくりの「大館市歴史的風致維持向上計画」には、「大館城下の町割りに残る歴史的風致」の外、「扇田神明社」・「田代岳の作占い」・「天然記念物“秋田犬”」・「鳳凰山周辺」・「浅利氏ゆかりの独鈷」の歴史的風致をテーマとした6つの柱があります。これらの歴史資源で、テ

ーマパークを作るのが歴史まちづくりではありません。先人から受け継いだそれぞれのストーリー、あるいは町の流れから、大館人としての誇りを取り戻したいと思っています。

大館の人口は減ってきていますが、大館と一緒に楽しいことをやろうという自治体が増えています。今の大館市は、次のことに取り組んでいます。

地域連携DMO(Destination Management Organization)として、小坂町、大館市、北秋田市、上小阿仁村で秋田犬ツーリズムを作りました。秋田犬のYouTube動画は、もう200万回見られており、更に高めたいと思います。そして、3つの館(函館、大館、角館)の3D連携です。東北では、図-5のとおり、歴まち認定都市が8つありますが、それを羽州街道で繋いでいくと弘前と大館の関係はさらに深まって行きます。ここに3D連携を落とし込むと違う動きが出てくるのではと思います。



◀図-5 羽州街道と歴史まちづくり都市

更に、後三年合戦の横手市と美郷町から平泉に移り、奥州藤原の概念を打ち立てて、大館の二井田(贄柵)で殺害された藤原泰衡で繋がります。今、横手市と美郷町、中尊寺、毛越寺と奥州藤原の案を検討しています。歴まちを含めて色々な展開が可能だと思います。あと、鶴岡は、2代目の現・ハチ公像の原形の石膏像があり繋がります。

大切なのは、大館の町に住んでいて、大館を知り好きになる。そうすると、同じようなことを考えている町と関係性が深まります。それをネットワーク化していく上で、一番大切なのは、やはり道です。これがこれからの道づくりを介したまちづくりです。

そして、陸路、空路、海路を通じて、東北全体に展開をしていくという流れを作っていくと考えています。今日、私が中座するのは、ハチ公サミットに出席するためです。東北の中核空港の仙台空港が、昨年4月に民営化されました。その運営企業グループの中核が、渋谷の忠犬ハチ公の銅像維持会の中心をなす東急グループです。その東急グループと大館が仲良くなることを介して、大館だけではなく、東北全体の入り口を作るために何が出来るかということを考えて、まちづくりに頑張りたいと考えています。

歴史まちづくりへの取り組みの提言

福原 この中核となる大館の歴史まちづくりですが、清野先生から提案を頂きたいと思います。

清野 私から、歴史まちづくりについて、お話ししたいと思います。

①史的建造物の保存補修に取り組む：桜櫓館などの伝統的な建造物があります。個人での補修・保存は難しい時代です。そのため、文化財を所有している方々が会を作って、対策を考えていくことも必要と思います。②歴史的風致地域の景観づくりに取り組む：景観が大変に大切です。道路の舗装、生け垣、外装など地域でまとまりのある景観づくりをして行く必要があるのだと思っています。③伝統文化の継承と振興・支援に取り組む：建物だけではなく、歴史のまちづくりにはなりません。人が活動し、それを楽しむような場は必要だと思います。祭りや民

俗芸能は、楽しさをもたらし、人と人を結びつけます。昨年秋に大館で開催された伝統行事の祭典「新・秋田の行事」は、大館の民俗芸能も参加して大変盛り上がりしました。また、今、学校では、ふるさとキャリア教育を実施していますが、子どもたちが地域行事や祭に参加するなどして、将来継承していける様に育てることは大変良いことと思います。大館では、大館神明社例祭、アメッコ市、扇田神明社例祭などがあります。また、子ども達が、代野稻荷神社の代野番楽、浅利氏に由来がある独蝮(とっこ)囃子に取り組んでいます。④歴史資源の認識向上と情報発信の充実を図る:今進めている「大館歴まち散歩」は、大変良いことと思います。「どこでも博物館」事業の標柱設置も進めています。また、秋田犬は、色々なイベントに参加して人気が高まってきています。⑤大館が長く育て・守ってきた資源の活用:林業は大館の特徴的な産業で、特産品の曲げわっぱや、八幡神社・桜櫓館などの伝統的な建造物、樹海ドームも木の文化です。また、きりたんぼなどの食文化、秋田犬・比内鶏などの天然記念物は、大館が長い間育て守ってきた資源・文化です。これらを大切に育んで行くべきと思います。

福原 非常に重要な提言だと思えます。そして、明日、矢立峠の探訪会がありますが、1桁国道から歩いて約5分で、樹齢300年以上の天然秋田杉を見られるのはここだけです。どんどん発信するべきだと思えました。

今、大館のためだけではなく、古里秋田のために何が出来るのか、大館の強みを意識した政策を作ろうとしています。町と町を繋げるのは道で、繋がっている道には、やはり物語が必要だと、今回強く感じました。そのことを改めて皆様と共有させて頂ければと思います。

ここで、私の時間が来ました。ここからは坂所長に進行をお願いします。(福原市長退席)

坂 それでは、清野先生から補足をお願いします。

清野 江戸時代の大館の家数や人数は、宝暦9年(1759)に外町12町をまとめると、家数431軒、人数2,253人、馬196疋です。内町の人数は、3,115人です。内町・外町計で、5,000人位住んでいたということになります。この人たちの生活のため羽州街道を利用した輸送が行われていました。

また、羽州街道は、物が流通するだけではなく、色々な有名人も通っていました。大館の人で、外で学び帰ってきて、大館の文化を高めた人物を紹介します。

【館天籟】江戸で苦学10年。儒学者山本北山の北山塾で塾頭を務め、後に秋田藩校の明德館で教授になっています。【藤森江岸】江戸・京都で各10年、絵の修行をし、大館の門下を育成しています。【大館城代十代佐竹義茂】漢詩や書に才能を発揮して、漢詩人の大窪詩仏と深く交わり、頼三樹三郎の来訪も受けています。【釈無等】東本願寺で仏教を、京都の皆川淇園に儒学を学びました。茶人としても有名で、酒田に玉川遠州流を伝え、今も酒田から大館に来ます。浄応寺住職でした。【狩野良知】昌平黌に学んでいます。開国論の「三策」を著しており、後に松下村塾蔵版が刊行されています。

この様に人の交流にも、街道は重要だったと思えます。

道路整備の役割・効果

坂 私からは、今の道路整備の役割と効果の話をしたしたいと思います。

現在の秋田県北地域の高速道路は、小坂から鷹巣インターチェンジまで来ました。西側では、二ツ井白神インターチェンジまで延びて来ています。そして、今年度には、鷹巣インターチェンジから1.7km伸びて、日本一地方空港に近いインターチェンジが出来ることとなります。

図-6は、大館能代空港の東京便利用客の推移です。秋田道

の延伸にしたがって、利用者が伸びている状況で、昨年13万人を突破し、今年も更に伸びています。



▲図-6 大館能代空港(東京便)の利用客数

大館能代空港からの60分で移動出来る地域が、高速道路の整備に伴い広がってきています。その結果、大館能代空港に西日本からチャーター便で来るツアー客が大幅に増えています。

ツアーのコースを見ると、ツアー①大館能代空港～十和田湖・奥入瀬溪流～湯瀬温泉泊～中尊寺～松島～鳴子泊～角館～秋田空港から帰ります。ツアー②大館能代空港～能代の風の松原～鱈ヶ沢泊～三内丸山遺跡～三沢泊～八戸を経て大館能代空港です。ツアー③2月で、大館能代空港～森吉山の樹氷～十和田湖泊～奥入瀬溪流～八甲田～金木～湯瀬温泉泊～大館能代空港の人気コースです。ツアー④5月の菜の花と桜の時期で、大館能代空港～大湯村～角館の桜～中尊寺～弘前の桜～青森～十和田湖～大館能代空港です。

このルートの立ち寄る観光地には、県外も有るので、秋田県内をもっと増やせれば良いと思います。

最後に

坂 最後に清野先生から、これまでの話を受けて、今後にまちづくりを進めるうえの提案があればお願いします。

清野 先ほど、木の文化の話をしました。少し広域で見ると天然秋田杉の矢立峠があります。そこから足を伸ばせば、小坂に鉱山事務所や芝居小屋の庚楽館、花輪には昔の図書館や公会堂を修復した資料館があり、これらも木の文化です。旅行を頻繁にした人は、A級の観光地からB級に移りますから、市町を越えた発想が大事ではないかと思えます。このコースは非常に面白いのではないのでしょうか。

坂 私からもお話ししたいと思います。

先ほど、大館能代空港からのツアーコースで「秋田県内の立寄り観光地をもっと増やしたい」と話しましたが、補足したいと思えます。

参訪交代で使っていた羽



▲図-7 街道と高速道路網

州街道や奥州街道は、今で言えば高速道路にあたると思います。この街道と高速道路網に、大館能代空港周辺の観光地を入れると図-7になり、新幹線、空港や高速道路だけのネットワークでは観光地へのアクセスが足りない部分が見えてきます。これに昔の街道である大間越街道、阿仁街道、三戸鹿角街道を少し入れていくだけで、観光地へのアクセスも良くなり、現代の道路ネットワークを大分充実させることが出来ることとなります。最後に、今の道路と昔の諸街道を含めたネットワークの提案をさせて頂きました。

これで第1分科会を終了したいと思います。

「ガイドから始まるまちづくり ～歴まちガイドを目指して～」

各地の街道や町並みで活躍するガイドたち。彼らが誇りを持って「わが街」を案内することは、やがてまちづくりにつながる大きな一歩になっています。歴史まち・大館を担うガイドの意義、役割について、他地域の事例をもとに語り合いました。

- コーディネーター **田中 孝治氏** (NPO法人全国街道交流会議理事)
- パネリスト **中村 弘美氏** (矢立自然友の会会長)
- 澤木 博之氏** (男鹿半島・大瀧ジオパークガイドの会会長)
- 平井 太郎氏** (NPO法人小田原まちづくり応援団副理事長)

田中孝治 (以下、**田中**) 本日お招きしたパネリストの3人は、それぞれの地域で、ガイドを実践しておられます。

今日は、皆さんが活動をしている中で出てきた課題や悩みも含めながら、どうしたら大館の歴史ガイドがうまく発展、定着させることができるのか、ということで話を進めさせていただきたいと思います。

活動の紹介

田中 中村さんが関わっている矢立峠は、菅江真澄、吉田松陰、伊能忠敬、イザベラ・バードなど、色々な人物が通った、歴史的に有名な街道です。また、自然の資源という点からも重要な舞台ですね。

中村弘美 (以下、**中村**) 矢立自然友の会は、平成2年4月に、矢立公民館のサークルとして発足しました。当時の公民館長から、退職した方々が山歩きをしながら、自然に親しみ、学べる会を創ってほしい、という話があったことがきっかけでした。



会の発足当時から、矢立峠の探訪を行っていました。そのころ、矢立峠の歴史の道の整備を一所懸命されている方がおりました。北羽歴史研究会の前会長である鷲谷豊さんで、「峠のことを勉強しながら手を入れてくれないか」ということを現場で言われました。それから、単に散策路に子供達や会員を連れて歩くだけではなく、歴史の道として私たちができる整備をやってきました。

そのうち、秋田県側ばかりでなく、青森県側の散策路整備も行うようになり、青森県側で活動されている人たちと一緒に、営林署や自治体に声掛けをしました。湿地帯に木道を造り、看板も設置しました。このことをきっかけに、隣県の方たちとの交流が深まり、自治体の協力を得る、という非常に良い形で

進みました。

探訪ルートを簡単に説明します。道の駅・やたて峠→樹齢300年以上の天然杉広場→古羽州街道→茶屋跡・吉田松陰漢詩碑→国境・矢立杉跡→吉田松陰「東北遊日記」説明板→青森県側入口説明板→明治新道→イザベラ・バード石碑→明治天皇行幸碑→明治新道入口→旧国道7号→道の駅というルートです。距離にして約4.3kmを約2時間半の行程で、春は新緑、秋は紅葉を眺めながら巡ります。小学生から高齢の方まで、年間、10から15組を案内しています。

田中 澤木さん、男鹿半島・大瀧ジオパークの価値と、どういう形でガイドをされているのかということを中心にお話をさせていただけますか。

澤木博之 (以下、**澤木**) ジオパークについてですが、ジオは地球とか大地という意味で、直訳すると「自然豊かな大地の公園」となります。男鹿半島・大瀧ジオパークは、縦横30kmのエリアに火山、地層、地質、岩石、奇岩に加え、山野草、地域の歴史や文化、風習などを合わせた、スケールの大きい大地の物語や歴史の宝庫です。

ジオパーク公式ガイドになるためには、2年間のガイド養成講座を受講しなければなりません。最初の年は初級講座、2年目は上級講座を受け、自然から歴史、伝統文化などを学びます。最後に認定試験を受けて合格すると公式ジオパークガイドとして認定されます。

今年の春で3回目が終了し、男性18人、女性16人が公式ガイドとして活躍しています。年齢層は20歳代から80歳代までいますが、多くは60歳から70歳代ですので、これからは、若い人にどうつなぐかが課題です。



ガイドのスキルアップにも力を入れています。男鹿半島・大瀧の地質や火山について、さまざまな研究者が論文発表されています。その最新情報を学ばないと、古い情報をお客様に

伝えることになるので、月に1回程度、それぞれの分野の先生による研修会を行っています。会員の年代が幅広いため、全員が理解するのは難しいのですが、ガイドの会の活動等は行政側の協力もあり順調に推移しています。

ガイドは、地域のいろいろなグループとネットワークを組んで、その地域の方々に地域のことを知ってもらうことが一番の基本だと考えています。住民に浸透させるには、一気にではなく、少しずつネットワークを広げたほうが良いと感じています。

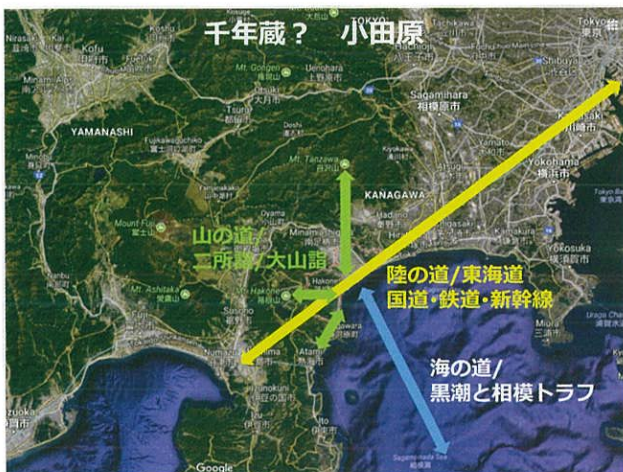
田中 いま国内では、多くの地域が日本や世界のジオパークに認定されています。さらにユネスコの世界遺産、文化庁の日本遺産など、地域や歴史を見直す様々な制度が来てきていますが、その価値をどうやって伝えていくか、ガイドの役割は非常に重要ですね。

続いて平井先生にお伺いします。「小田原まちづくり応援団」は有名で、活動の様子が伝わってきます。その中にある「まちえん」という言葉と、「小田原宿千年蔵構想」について、活動紹介とともに教えてください。

平井太郎(以下、平井) 私は6年前から弘前大学で教鞭をとっています。

平成12年、市民、研究者、市職員が関わり「小田原市政策総合研究所」ができ、そこで小田原宿千年蔵構想をつくりました。その時のメンバーが平成15年にNPO法人小田原まちづくり応援団を立ち上げました。「まちえん」は小田原まちづくり応援団の略称です。「えん」は応援の「援」と、えにしの「縁」を掛けたものです。

平成22年からは、市が買い取った旧黒田侯爵の別荘を拠点にして、小田原のまち案内をやっています。今では、お客様が年間約4万人、ガイド収入は100万円から150万円くらい。飲食の売り上げが約1千万円と、かなり大きな組織になりつつあります。



小田原の人たちは、地域資源があり過ぎる、という贅沢な悩みを抱えています。小田原城には年間500万人が訪れ、日本最大の観光地・箱根が控えています。物産も蒲鉾、高級梅干し、箱根寄せ木細工などがあります。地域資源を生かす時に、「どれだけ高く売るか」ということが課題になると思いますが、小田原ではこれ以上何をすれば良いの、という状態でした。

しかし、町の中を歩いてみると発見がありました。一番驚いたのは鯉節屋でした。建物は海岸から通りまでつながっていて、水揚げしたカツオやサバを、捌く、煮る、カビ付けという一連の工程が建物の内部で行われていました。建物の中を通ってくと鯉節になってしまうという優れた工場で、最後

に通りに面して販売する仕組みを見て、地域の自然とそこに育まれた生活を繋ぐなりわいの文化が小田原のコンセプトだと気づき、千年にわたって自然と共に生きてきたなりわいの文化、千年蔵構想につながりました。

小田原城跡は、明治～大正時代には御用邸として使われ、周辺には山縣有朋や伊藤博文などの政治家や財界人の広大な別荘が建てられました。その後、これらの建物は企業の保養施設になり、バブル崩壊とともに切り売りされていました。このため小田原市が歴史まちづくりで買取りを進めました。平成22年、黒田侯爵邸の建物をカフェに改装し、まち歩き拠点としました。侯爵家のお茶会やひな祭などを再現しています。また、色々なお店も巻き込んで雛めぐりを行っています。

北原白秋のカラタチの道など教科書に出てくるような歴史ではなく、自らが生きている小田原の色々なことについて、資料を集め勉強し、分かりやすい物語にして、皆さんに歩いて体感して頂き、ゆっくり過ごして貰うことも行っています。

田中 澤木さんのお話にもあったとおり、地域づくりにはネットワークが必要で、自分の町のことだけ語っていても町の本当の姿が分からないと思います。基調講演の話にも出ましたが、大館だけで何かをやってきたのではなく、頻繁な往来の中で町が成り立ってきたということを考えると、これからガイドをやっていく時に、広域の視点が非常に有効だと思います。

もう一点、六次産業化は、一般に一次産業という捉え方をされていますが、観光が食材を加工して土産を売れば観光の六次産業化もあるのではないかと思います。農業だけという壁を作って議論する時代ではないと思います。ガイドにも、できるだけそういった壁を取り払った視点も必要だと思います。

ガイドに必要な心・技・体

田中 ガイドの仕組みとして、まちに対する関心や思いは非常に重要です。一方で思いと熱意さえあればすべて解決すると思込みがちです。「心・技・体」と言いますが、まち歩きも同じで、「心」=地域に対する熱い思いと関心、「技」=それを掘り起こし伝える知恵と技術、「体」=それを発展させるための仕組みや組織だと思います。

大館の歴史まちづくりを考えていくにあたり、心・技・体を中心にした議論いただきたいと思います。ボランティアガイドという仕組みがありますが、ジオガイドは、技術的、制度的に、ボランティアガイドに比べてかなり整っている印象がありますが、澤木さん、いかがですか。

澤木 ジオガイドの会はジオパークの指定を受けてから立ち上がりました。行政がガイド養成、料金体系などを整えましたが、窓口は一般的によくある観光課や観光協会などではなく、男鹿市、大潟村ともに教育委員会内に設けた推進協議会事務局とし、観光行政とは一線を画しています。

ガイド依頼は事務局からガイドの会に来て、それを会員に一齐に流します。手を挙げた会員の中から、案内回数のバランスなどを考慮し、振り分けます。

心・技・体のお話がありましたが、活動をしているいろいろな問題が出て来て、それを解決するのに四苦八苦しています。しかし、問題が出てくるのは活動している証拠と捉え、行政とベクトルを合わせて問題を解決しています。

ガイド料金は時間単位で、最低2千円から最高8千円まで。全国のジオパークはだいたい横並びです。お客様20名までガイド1名が対応、20名を超えるとガイド2名の対応に

なります。

田中 ネイチャーガイドやナチュラルリストガイド、ジオガイドの場合は、お客さんが料金を払うことに対して理解がある。しかし、歴史など文化系のガイドは、お客さんにお金を払うという意識があまりないと聞きます。料金を払う側からの理解は得られていますか。

澤木 事務局に依頼が来た時点で料金を説明し、高いときは、行程や時間を減らすといった調整をするので、私たちは、そこまで考えたことはありません。

田中 どんな団体でもアンケートを取ると、活動資金が足りないという回答が出てきます。中村さんの資料に民間の応援制度「大館愛購運動」というのがありますが、これはどのようなものですか。

中村 大館青年会議所が事務局で、賛同してくれる商店などが加盟します。消費者は加盟店で買い物をする、ポイントが貰えます。そのポイントを、登録している学校PTA、スポーツ少年団や矢立自然友の会などの団体を消費者が指名し、寄付する仕組みです。寄付額はその団体によって様々です。私たちは、刈り払い機の燃料代などに充てています。

田中 地域に愛着を持つことで、活動資金を互いに生み出していくというのは、先ほどお話しした心・技・体の技、知恵の一つだと思います。こういうやりかたもあるんですね。

中村 私たちの会の会員は、30人で始まって、現在37人で、年会費の1千円が原資です。事務局は公民館で、依頼があった際に料金のお話が出れば、「ガイド1人5千円、20人以上になるとガイドが2人で1万円です」ということをお伝えします。

ガイドの役割

田中 ガイドとは何か。平井さんにお伺いします。

平井 小田原で良い思い出をつくってもらい、お金を使ってもらうためには、小田原の物語を聞いていただき、長い時間を過ごしてもらうことが必要です。そのためには、ガイドの力が大事です。例えば、矢立峠の自然の道をただ歩いてしまったり、ジオパークの岩をただの岩として眺めてしまったりするのではなく、一つひとつに様々な知識を持つことが大事です。

歴史まちづくりについて言うと、大きなポイントは、文化財とそこに暮らす人々の営みです。営みとは、大館で暮らしてきた皆さんが歩んできた生活の歴史、生活で学んできた情報や知識であり、文化財と生活者の情報のかみ合わせが大事です。

歴史ボランティアガイド養成の仕組みは各地にあります。3年間の勉強など長い時間をかけてガイドになりますが、ガイドは自分が勉強した知識を話したがりです。お客様は勉強に来ているわけではないので、頭に入りません。

多面的な話をするためには、普段の生活の中でアンテナを張って、いろいろな人と話をするのが大事です。それぞれの持ち味を生かして話ができるガイドがポイントだと思います。

田中 平井さんのお話の様に、相手を無視して一気に知識を吐き出すタイプのガイドが結構います。観光ボランティアガイドが抱える問題で指摘されているのは、ガイドの質と力量と、ボランティアだから、してやっているという意識があります。

そもそも、ガイドが無償ということに原因があるのでしょうか。お金のことは言わない方が格好良いという日本人的なところがある様ですが、団体は活動資金が必要です。他の方法で資金を得ることができるのであれば併用しながら、仕組みとして適正なガイド料金は貰うべきではないでしょうか。

大館の歴史ガイドのこれからについて、アドバイスがありましたらお願いします。

澤木 ガイド料は高いに越したことはないのですが、バランスが難しい。プライドを持ってガイドできる仕組みが必要だと思います。また、平井さんの言う様に、場数を踏むことが大切です。お客様は十人十色、千差万別なので、説明は10分位が限度で、ガイドとして伝えたい要点をまとめ、できるだけ簡潔に話すことが大切です。歴史や生活の裏話は面白くなって長く聞いてくれますね。

平井 歴史まちづくりでは、歴史的建造物など、後世に残すべき歴史的風致を選びます。その点と点を繋いでいくのがガイドです。地域の歴史は、縄文～江戸時代、近代が積み重なって出来ています。時代で区切られているものに竹串を刺していくのが地域の皆さんの生活感ですから、歴史や産業、生業、色々結び付ける形でガイド養成していくと、新しい大館型の歴史まちガイドが出来ていくのではないかと期待しています。

中村 平成18年に矢立峠のガイドマニュアルを作りました。新聞で紹介されたり、仲間に知らせたりしていけば、市民も理解してくれて裾野が広がるのではないかと思ったのですが、それだけではだめでした。今年、市の事業を活用してガイドマップを作成しました。大館市は「ふるさとキャリア教育」を行っています。未来を支える小中学生にふるさとの素晴らしさを勉強して貰いたくて、小中学校、公民館にマップを置いたりしています。地道な活動を続けていけば、私たちの後継者が出てくると思っています。

まとめ

田中 駐日大使だったエドウィン・ライシャワーが、「山の向こうのもう一つの日本」（東北を見て山の向こうにもう一つの日本がある）と言っていますが、訪日外国人旅行は、これまで東京と大阪のベルト地帯だけを歩き、買物をしていた外国人に、「本当の日本を知りたい」という動きが出てきています。彼らが訪れたことがない、東北の魅力は、最大の資源になります。まち歩きや街道歩き、自転車でも巡ることもあります。

「景観十年、風景百年、風土千年」という言葉がありますが、ジオパークや歴史まちづくりでも、我々が教科書で習った時代を輪切りにした伝え方ではなく、自然の中でどういう風土ができて、どういう営みがあったのか。単に地域の歴史を語り、伝えるのではなく、地域の歴史を背中に背負って前を見たら何が見えるのか、それをガイドが伝えることが必要だと思います。

棟方志功は版画集『新日本百景』で、自然がある、川がある、史跡があると言うだけでは不十分で、その美しいもの、大切なものを認知しない限り価値は生まれない。と述べています。これを手助けするのがガイドの役割です。

繰り返しますが、歴史を背負って前を見たら何が見えるのか。歴史が今にどう繋がり、我々の生活や町があるのか。そして、未来にどう伝え、どうしていこうかという思考も必要です。

遺産や遺跡を語り、教え込むのはガイドの役割ではないと思います。お金をもらって質を上げ、ガイド組織を安定させていくことを考える必要があります。皆さんでしっかり議論されて、仕組み作りをしていただきたいと思います。

この国をめがけて海外から人がやってきます。本当の日本を伝えて行くというためには東北というのは大事な地域です。よろしくお願ひしたいと思います。

基調講演



講師
渡辺 英夫 氏
秋田大学
教育文化学部教授

栃木県生まれ。昭和56年茨城大学人文学部卒業。昭和61年東北大学大学院文学研究科国史学博士課程単位取得満期退学。昭和61年東北大学文学部助手、昭和62年山形県立米沢女子短期大学講師、平成2年秋田大学教育学部講師、平成3年助教授、平成15年教授、現在に至る。専門：日本近世史。著書：『秋田県の歴史』共著 山川出版社、『東廻海運史の研究』山川出版社、『横手市史・史料編（近世1・2）』、『秋田の近世近代』編著 高志院書ほか。

第1分科会



鼎談者
清野 宏隆 氏
大館市文化財保護協会
事務局長

三種町生まれ、大館市在住。昭和38年新潟大学人文学部卒業。昭和38年花輪高校以来、大館鳳鳴高校などで教鞭をとり、大館高校校長、能代高校校長を歴任。現在、大館市文化財保護審議会会長、大館市文化財保護協会事務局長。藩政時代の町割図をつかい「城下町大館の昔と今」の講演や「大館歴まち散歩」の案内などを行っている。また、安藤昌益や狩野亨吉など大館にゆかりの人物にも造詣が深い。



鼎談者
坂 憲浩 氏
能代河川国道事務所長

埼玉県生まれ。平成6年中央大学理工学部卒業、平成8年中央大学大学院理工学研究科修了。平成8年北海道開発庁入省、北海道開発局、国土交通本省北海道局・道路局勤務などを経て、北海道開発局札幌開発建設部千歳道路事務所長から、平成28年4月能代河川国道事務所長就任。



鼎談者
福原 淳嗣 氏
大館市長

大館市生まれ。平成7年慶應義塾大学法学部卒業。平成7～15年大館市議会議員2期。平成15年野呂田芳成衆議院議員公設第一秘書官・政策担当秘書官、平成21年金田勝年衆議院議員政策担当秘書官。平成23年コンサルティング会社主席研究員を経て、平成27年大館市長。現在に至る。市政運営の5つの柱の1つとして、「にぎわいのまち大館」を掲げて、歴史と文化のまちづくりを進めている。

第2分科会



コーディネーター
田中 孝治 氏
NPO 法人
全国街道交流会議理事

北海道生まれ、静岡県在住。平成2年(社)静岡政経研究会・地域産業研究所常務理事所長を経て、平成23年(株)日本平ホテル監査役。ふじのくにしずおか観光振興アドバイザー。平成13年NPO法人エヌ・ピー・オー伊豆専務理事。NPO法人地域づくりサポートネット副代表理事、代表理事を経て副会長。平成23年NPO法人日本風景街道コミュニティ理事を務める。



パネリスト
中村 弘美 氏
矢立自然友の会会長

大館市生まれ、大館市在住。大館市議会議員。矢立自然友の会会長、羽州街道交流会幹事、羽州街道矢立峠散策会主宰。主に羽州街道秋田・津軽藩境矢立峠の自然と歴史をテーマにして活動を行い、峠の整備や保全に努めながら、毎年探訪ツアーを開催している。また、矢立峠を通った伊能忠敬、吉田松陰、明治天皇、イザベラ・バードなどの記録を表す説明板や標柱の設置を進めている。



パネリスト
澤木 博之 氏
男鹿半島・大潟
ジオパークガイドの会
会長

男鹿市生まれ、男鹿市在住。秋田地学教育学会員、日本自然保護協会指導員。自然フィールドでの活動を主にし、平成27年からジオパーク・ガイドとして活動。フェイスブックで男鹿半島・大潟ジオパークのすばらしさを発信している。自然観察会活動などを含め、毎日のようにフィールドに出かけている。アマチュア無線、ジョギング、釣り、登山・トレッキングを趣味としている。



パネリスト
平井 太郎 氏
NPO法人
小田原まちづくり応援団
副理事長

小田原市生まれ、弘前市在住。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。平成24年弘前大学人文社会学部・同大学院地域社会研究科准教授、現在に至る。専門：社会学(地域における合意形成)。小田原まちづくり応援団は、東海道小田原城下に江戸時代から残る老舗の活性化のために“生業(なりわい)のまちづくり”として、まち歩きガイドの活動などを行っている。



探訪会 A 【羽州街道矢立峠コース】

※ ～は徒歩



道の駅・やたて峠、天然杉広場

伊能忠敬測量隊記念標柱

茶屋跡・吉田松陰の漢詩碑



旧国境・矢立杉跡

吉田松陰 東北遊日記説明版

峠下御番所跡と明治新道



イザベラ・バード記念碑

明治天皇行幸碑跡

昼食：道の駅・やたて峠

街道談義



東北各地から
持ち寄った地酒



次回開催地の
花笠締め



二次会でも
乾杯！

探訪会 B 【大館歴史まち歩きコース】

※ ～は徒歩



部垂八幡神社



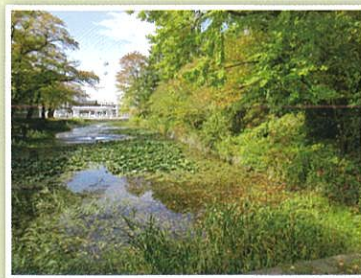
大館八幡神社



遍照院



桜櫓館



大館城跡 (桂城公園)



秋田犬会館



狩野良知・亨吉生家跡 (石田ローズガーデン)



浄応寺



真田幸村の墓 (一心院)



松下村塾 (模築)

街道パネル展、物販 ほか



秋田犬の「飛鳥」もお出迎え